RENSx アルゴリズム解説

RENSx algorithm: a versatile source localization algorithm for various types of biomagnetic imaging

株式会社 シグナルアナリシス 関原謙介

1 はじめに

RENSx アルゴリズムは脳磁界計測を始めとして,脊髄磁場計測,末梢神経磁場計測あるいは心磁 界計測など,生体磁場計測のいろいろな分野において有用な信号源推定アルゴリズムである.RENSx アルゴリズムはスパースベイズラーニング(sparse Bayes learning, SBL)をベースにしたアルゴリズ ムであるが,生体磁気計測データからの信号源再構成問題に対応するため,SBLを土台としていくつ かの工夫・改良が施されている.一般的なSBLアルゴリズムについては,ベイズ信号処理[1]の第5章 やシグナルアナリシス社技術資料[2]に詳しい解説があるので,このノートは,このアルゴリズムの特 に信号源再構成問題に特化した部分を解説する.このノートにおける説明は,ほぼ Electromagnetic Brain Imaging (EBI)[3]の第4章の内容に沿ったものである.

2 種々の定義とデータモデル

2.1 データベクトルとソースベクトル

m番目のセンサーの時刻 tにおける出力を $y_m(t)$ で表し,センサーアレイ全体の出力を列ベクトル

$$\boldsymbol{y}(t) = \begin{bmatrix} y_1(t) \\ y_2(t) \\ \vdots \\ y_M(t) \end{bmatrix}$$
(1)

で表す.ここで, M はセンサーアレイに含まれるセンサー数である.3 次元空間における位置をベクトルr = (x, y, z) で表す.位置rに計測の対象となっている信号を発している信号源が存在すると仮定する.信号源は時間的に変動する3次元ベクトルであり,位置rにおける時刻tの信号源(ソース)ベクトルをs(r)と表し,

$$\boldsymbol{s}(\boldsymbol{r},t) = \begin{bmatrix} s_x(\boldsymbol{r},t) \\ s_y(\boldsymbol{r},t) \\ s_z(\boldsymbol{r},t) \end{bmatrix}$$
(2)

とする.ここで $s_x(\mathbf{r},t), s_y(\mathbf{r},t), s_z(\mathbf{r},t)$ はソースベクトルのx, y, z 成分である.

2.2 センサーリードフィールド(センサー感度ベクトル)

次にセンサーリードフィールドを定義する. 位置 r に単位強度の信号源が存在すると仮定し, この 信号源が, x 方向を向いている場合のこの単位強度の信号源による m 番目のセンサーの出力を $l_m^x(r)$ とする. 同様に, この信号源が y 方向を向いている場合の出力を $l_m^y(r)$, z 方向を向いている場合の 出力を $l_m^z(r)$ とする. すると, 3 次元の行ベクトル $l_m(r)$,

$$\boldsymbol{l}_m(\boldsymbol{r}) = [l_m^x(\boldsymbol{r}), l_m^y(\boldsymbol{r}), l_m^z(\boldsymbol{r})]$$
(3)

がm番目のセンサーの位置rにおける感度を表す.この $l_m(r)$ を用いて, $M \times 3$ の行列を

$$\boldsymbol{L}(\boldsymbol{r}) = \begin{bmatrix} \boldsymbol{l}_1(\boldsymbol{r}) \\ \vdots \\ \boldsymbol{l}_M(\boldsymbol{r}) \end{bmatrix}$$
(4)

と定義すれば, この L(r) がセンサーアレイ全体の位置 r における感度を表す.この行列 L(r) はリードフィールド行列と呼ばれる.このリードフィールド行列を用いて,観測ベクトル y と空間に分布した信号源ベクトル s(r) の関係は

$$\boldsymbol{y} = \int_{\Omega} \boldsymbol{L}(\boldsymbol{r}) \boldsymbol{s}(\boldsymbol{r}) \, d\boldsymbol{r} \tag{5}$$

と表現できる.ここで,右辺の積分は信号源が存在する可能性のある3次元の領域 Ω について行う.この Ω を信号源空間 (source space) と呼ぶ.

2.3 離散ソースモデル

式 (5) に示される積分方程式を,信号源空間をボクセル分割により離散化し,線型方程式に変換 する.各ボクセルの座標を r_1, r_2, \ldots, r_N とする.ここでボクセル上に存在する離散的な信号源で信 号源分布が近似できるとして,信号源分布をデルタ関数を用いて

$$\boldsymbol{s}(\boldsymbol{r},t) = \sum_{j=1}^{N} \boldsymbol{s}(\boldsymbol{r}_j,t) \delta(\boldsymbol{r}-\boldsymbol{r}_j)$$

と表せば,これを式(5)に代入して

$$\boldsymbol{y}(t) = \sum_{j=1}^{N} \boldsymbol{L}(\boldsymbol{r}_j) \boldsymbol{s}(\boldsymbol{r}_j, t)$$
(6)

を得る.ここで以下に定義される M×3N 行列

$$\boldsymbol{F} = [\boldsymbol{L}(\boldsymbol{r}_1), \boldsymbol{L}(\boldsymbol{r}_2), \dots, \boldsymbol{L}(\boldsymbol{r}_N)]$$
(7)

を導入する.この F はボクセルリードフィールド行列と呼ばれる.さらに, $3N \times 1$ の列ベクトル x(t) を

$$\boldsymbol{x}(t) = \begin{bmatrix} \boldsymbol{s}(\boldsymbol{r}_1, t) \\ \boldsymbol{s}(\boldsymbol{r}_2, t) \\ \vdots \\ \boldsymbol{s}(\boldsymbol{r}_N, t) \end{bmatrix}$$
(8)

と定義する.このx(t)はすべてのボクセル位置の信号源ベクトルを含む列ベクトルであり,式(2)で定義されたソースベクトルと区別するためボクセルソースベクトルあるいはボクセルベクトルと呼ぶ.すると,式(6)は

$$\boldsymbol{y}(t) = [\boldsymbol{L}(\boldsymbol{r}_1), \boldsymbol{L}(\boldsymbol{r}_2), \dots, \boldsymbol{L}(\boldsymbol{r}_N)] \begin{bmatrix} \boldsymbol{s}(\boldsymbol{r}_1, t) \\ \boldsymbol{s}(\boldsymbol{r}_2, t) \\ \vdots \\ \boldsymbol{s}(\boldsymbol{r}_N, t) \end{bmatrix} = \boldsymbol{F}\boldsymbol{x}(t)$$
(9)

と表すことができる.さらに,観測結果には,信号成分に加法的にノイズ *e* が重畳すると仮定すれば,観測データのモデルは

$$\boldsymbol{y}(t) = \boldsymbol{F}\boldsymbol{x}(t) + \boldsymbol{\varepsilon} \tag{10}$$

となる.ノイズベクトル ε は M 次元の列ベクトルで $\varepsilon = [\varepsilon_1, \varepsilon_2, \dots, \varepsilon_M]^T$ であり, j 番目の要素 ε_j は j 番目の観測データ $y_j(t)$ に重畳するノイズを表す.式 (10) が観測データを表す線形離散モデルである.

データが時刻 t_1, t_2, \ldots, t_K で計測される時系列データであるとする.表記法を簡単にするため 時刻 t_k で計測されたデータベクトルを y_k ($y(t_k) = y_k$)で表し,時刻 t_k のソースベクトルを x_k ($x(t_k) = x_k$)と表す.すると,式 (10) は

$$\boldsymbol{y}_k = \boldsymbol{F} \boldsymbol{x}_k + \boldsymbol{\varepsilon} \tag{11}$$

と表される.時系列データの全体 y_1, y_2, \ldots, y_K をyで表す(つまり,yと書いてあれば y_1, y_2, \ldots, y_K を意味する.)同様に, x_1, x_2, \ldots, x_K をxと表す.後の議論のため行列Fのj番目の列ベクトルを f_j で表す.すなわち, f_j を用いると

$$oldsymbol{F} = [oldsymbol{f}_1, oldsymbol{f}_2, \dots, oldsymbol{f}_{3N}]$$

である.

3 スパースベイズ学習

3.1 確率モデル

式 (11) で表されたのモデルのもとで,観測データ y から未知な信号源分布 x を推定する問題を考える.ノイズの確率分布として平均ゼロ,共分散行列 Σ_{ϵ} の多次元正規分布

$$p(\boldsymbol{\varepsilon}) = \mathcal{N}(\boldsymbol{\varepsilon}|\mathbf{0}, \boldsymbol{\Sigma}_{\boldsymbol{\varepsilon}}) \tag{12}$$

を仮定する.式 (11) のデータモデルと式 (12) のノイズの確率分布からデータ y_k の条件付き確率分 布 $p(y_k|x_k)$ が

$$p(\boldsymbol{y}_k | \boldsymbol{x}_k) = \mathcal{N}(\boldsymbol{y}_k | \boldsymbol{F} \boldsymbol{x}_k, \boldsymbol{\Sigma}_{\boldsymbol{\varepsilon}})$$
(13)

と求まる.

ベイズ学習ではこれから推定する未知量 x に対する事前分布を導入する.スパースベイズ学習で は事前分布として,要素 $x_i(t)$ に対して分散が ν_i で,要素間で独立な正規分布:

$$p(x_j(t)) = \mathcal{N}(x_j(t)|0,\nu_j) \tag{14}$$

を仮定する.ベクトル確率変数 x_k ($x_k \in \mathbb{R}^{3N imes 1}$)に対する確率分布は

$$p(\boldsymbol{x}_k) = \mathcal{N}(\boldsymbol{x}_k | \boldsymbol{0}, \boldsymbol{\Upsilon}) \tag{15}$$

となる.この事前分布の共分散行列 Υ ($\Upsilon \in \mathbb{R}^{3N \times 3N}$) はベクトル ν ($\nu \in \mathbb{R}^{3N \times 1}$)を $\nu = [\nu_1, \nu_2, \dots, \nu_{3N}]^T$ と定義して,

$$\boldsymbol{\Upsilon} = \operatorname{diag}(\boldsymbol{\nu}) \tag{16}$$

と表される対角行列となる.つまり 2 はこの ν の要素を対角成分として持つ対角行列である.

3.2 事後確率分布の導出

ボクセルソースベクトル x_k のもっとも確からしい推定解は,事後分布 $p(x_k|y_k)$ を最大とする x_k として求めることができる(MAP(maximum a posteriori)推定解).事前分布(式(15))と尤度(式(13))が正規分布の場合,事後分布 $p(x_k|y_k)$ も正規分布で与えられる.したがって,事後分布 を平均 \bar{x}_k ,精度行列(共分散行列の逆行列) Γ の正規分布

$$p(\boldsymbol{x}_k | \boldsymbol{y}_k) = \mathcal{N}(\boldsymbol{x}_k | \bar{\boldsymbol{x}}_k, \boldsymbol{\Gamma}^{-1})$$
(17)

とすれば,精度行列と平均は

$$\boldsymbol{\Gamma} = \boldsymbol{\Upsilon}^{-1} + \boldsymbol{F}^T \boldsymbol{\Sigma}_{\boldsymbol{\varepsilon}}^{-1} \boldsymbol{F}$$
(18)

$$\bar{\boldsymbol{x}}_k = \boldsymbol{\Gamma}^{-1} \boldsymbol{F}^T \boldsymbol{\Sigma}_{\boldsymbol{\varepsilon}}^{-1} \boldsymbol{y}_k \tag{19}$$

として求まる¹.したがって,事後分布 $p(x_k|y_k)$ を最大とする解,すなわち,未知量 x_k の MAP 推定解は,正規分布では期待値で確率最大となるのであるから,式 (19) で与えられる \bar{x}_k である.式 (19) を等価な別の表現に変換する.逆行列公式(ベイズ信号処理 (A.51))を用いて,

$$\bar{\boldsymbol{x}}_{k} = (\boldsymbol{\Upsilon}^{-1} + \boldsymbol{F}^{T}\boldsymbol{\Sigma}_{\boldsymbol{\varepsilon}}^{-1}\boldsymbol{F})^{-1}\boldsymbol{F}^{T}\boldsymbol{\Sigma}_{\boldsymbol{\varepsilon}}^{-1}\boldsymbol{y}_{k} = \boldsymbol{\Upsilon}\boldsymbol{F}^{T}(\boldsymbol{F}\boldsymbol{\Upsilon}\boldsymbol{F}^{T} + \boldsymbol{\Sigma}_{\boldsymbol{\varepsilon}})^{-1}\boldsymbol{y}_{k} = \boldsymbol{\Upsilon}\boldsymbol{F}^{T}\boldsymbol{\Sigma}_{y}^{-1}\boldsymbol{y}_{k}$$
(20)

が成り立つ.ここで,

$$\boldsymbol{\Sigma}_{\boldsymbol{v}} = \boldsymbol{\Sigma}_{\boldsymbol{\varepsilon}} + \boldsymbol{F} \boldsymbol{\Upsilon} \boldsymbol{F}^{T} \tag{21}$$

であり, この Σ_y はモデルデータ共分散行列と呼ぶ. さらに,後の議論のために式 (20) を重み行列 を用いて

$$\bar{\boldsymbol{x}}_k = \boldsymbol{\Omega} \boldsymbol{y}_k \tag{22}$$

と書く. つまり,事後平均 x_k は観測データ y_k の線形推定解として表され, x_k を推定する重み Ω は

$$\boldsymbol{\Omega} = \boldsymbol{\Upsilon} \boldsymbol{F}^T \boldsymbol{\Sigma}_y^{-1} \tag{23}$$

で与えられる.

以上の議論から明らかであるが,未知量 x_k のベイズ推定解(MAP 推定解) \bar{x}_k を計算するには ハイパーパラメータ Υ (すなわちその対角成分である ν)とノイズ共分散行列 Σ_{ε} が必要である. RENSx アルゴリズムではこれらを観測データ y から推定する.以下にまず,ハイパーパラメータ Υ の推定ついて説明する.

3.3 ハイパーパラメータ*v*の学習

3.3.1 周辺尤度の最大化による v の学習

A. 周辺尤度の導出

ハイパーパラメータ Υ , すなわちその対角成分 ν の最適推定解 $\hat{\mu}$ は時系列データの周辺尤度

$$\log p(\boldsymbol{y}|\boldsymbol{\nu}) = \log p(\boldsymbol{y}_1, \dots, \boldsymbol{y}_K | \boldsymbol{\nu}) = \sum_{k=1}^K \log p(\boldsymbol{y}_k | \boldsymbol{\nu})$$

を最大とする ν として求めることができる.ここで, $\log p(y_k|\nu)$ は k 番目のタイムサンプルにおける観測データ y_k に対する周辺尤度である.この周辺尤度 $p(y_k|\nu)$ を求めるにはいくつかの方法がある.最も直截的な方法は

$$p(\boldsymbol{y}_k|\boldsymbol{\nu}) = \int p(\boldsymbol{y}_k, \boldsymbol{x}_k|\boldsymbol{\nu}) d\boldsymbol{x}_k = \int p(\boldsymbol{y}_k|\boldsymbol{x}_k) p(\boldsymbol{x}_k|\boldsymbol{\nu}) d\boldsymbol{x}_k$$
(24)

から求めるものである.式 (24) において $p(y_k|x_k)$ は式 (13) で与えられ, $p(x_k|\nu)$ はで与えられるの でこれらを代入し,右辺の積分を計算すれば $p(y_k|\nu)$ を求めることができる.この正攻法による周辺 ¹ベイズ信号処理の 3.4 節を参照のこと. 尤度の計算は「ベイズ信号処理」5.3 節に詳しく説明してある.ただし,この積分の実行にはかなりな計算を必要とする.この積分を計算する方法よりも若干計算の楽な別の方法について「信号処理のための線形代数入門」[4]の8.2.3 項に説明がある.ここでは,周辺尤度 $p(y_k|\nu)$ のさらに簡単な計算法を示す.

ここでは,

$$\log p(\boldsymbol{y}_k|\boldsymbol{\nu}) = -\frac{1}{2}\log|\boldsymbol{\Sigma}_y| - \frac{1}{2}\left[(\boldsymbol{y}_k - \boldsymbol{F}\bar{\boldsymbol{x}}_k)^T\boldsymbol{\Sigma}_{\boldsymbol{\varepsilon}}^{-1}(\boldsymbol{y}_k - \boldsymbol{F}\bar{\boldsymbol{x}}_k) + \bar{\boldsymbol{x}}^T\boldsymbol{\Upsilon}^{-1}\bar{\boldsymbol{x}}\right]$$
(25)

と求まることを証明する.式(12)に示すように

$$oldsymbol{arepsilon} \sim \mathcal{N}(oldsymbol{arepsilon} | oldsymbol{0}, oldsymbol{\Sigma}_{oldsymbol{arepsilon}})$$

を仮定している,また,式(11)と(15)が成り立つので,

$$Fx_k \sim \mathcal{N}(Fx_k|0, F\Upsilon F^T)$$
 (26)

が成り立つ.確率変数 y_k は独立な正規分布に従う 2 つの確率変数 $Fx_k \ge \epsilon$ の和で表される.独立な正規分布の和はやはり正規分布であり,

$$\boldsymbol{y}_{k} = \boldsymbol{F}\boldsymbol{x}_{k} + \boldsymbol{\varepsilon} \sim \mathcal{N}(\boldsymbol{y}_{k}|\boldsymbol{0}, \boldsymbol{F}\boldsymbol{\Upsilon}\boldsymbol{F}^{T} + \boldsymbol{\Sigma}_{\boldsymbol{\varepsilon}}) = \mathcal{N}(\boldsymbol{y}_{k}|\boldsymbol{0}, \boldsymbol{\Sigma}_{y})$$
(27)

である².したがって,

$$\log p(\boldsymbol{y}_k) = -\frac{1}{2} \log |\boldsymbol{\Sigma}_y| - \frac{1}{2} \boldsymbol{y}_k^T \boldsymbol{\Sigma}_y^{-1} \boldsymbol{y}_k$$
(28)

を得る.さらに,

$$\boldsymbol{y}_{k}^{T}\boldsymbol{\Sigma}_{y}^{-1}\boldsymbol{y}_{k} = (\boldsymbol{y}_{k} - \boldsymbol{F}\bar{\boldsymbol{x}}_{k})^{T}\boldsymbol{\Sigma}_{\boldsymbol{\varepsilon}}^{-1}(\boldsymbol{y}_{k} - \boldsymbol{F}\bar{\boldsymbol{x}}_{k}) + \bar{\boldsymbol{x}}_{k}^{T}\boldsymbol{\Upsilon}^{-1}\bar{\boldsymbol{x}}_{k}$$
(29)

の関係³を用いれば結局,時系列データに対する周辺尤度として

$$\log p(\boldsymbol{y}|\boldsymbol{\nu}) = \sum_{k=1}^{K} \log p(\boldsymbol{y}_{k}|\boldsymbol{\nu}) = -\frac{K}{2} \log |\boldsymbol{\Sigma}_{y}| - \frac{1}{2} \sum_{k=1}^{K} \left[(\boldsymbol{y}_{k} - \boldsymbol{F}\bar{\boldsymbol{x}}_{k})^{T} \boldsymbol{\Sigma}_{\boldsymbol{\varepsilon}}^{-1} (\boldsymbol{y}_{k} - \boldsymbol{F}\bar{\boldsymbol{x}}_{k}) + \bar{\boldsymbol{x}}_{k}^{T} \boldsymbol{\Upsilon}^{-1} \bar{\boldsymbol{x}}_{k} \right]$$
(30)

を得る.ここで, Σ_y は式 (21) に示すモデルデータ共分散行列である.

B. ハイパーパラメータ更新式の導出

ハイパーパラメータ v の最適な推定解 ŵ は式 (30) において

$$\frac{\partial}{\partial \boldsymbol{\nu}} \log p(\boldsymbol{y} | \boldsymbol{\nu}) = 0$$

とおいて求まる ν である.この微分計算は「ベイズ信号処理」5.4 節で詳しく述べられていおり,事後共分散行列 Σ を $\Sigma = \Gamma^{-1}$ と定義して, Σ の $\{j, j\}$ 要素を $\Sigma_{j,j}$ と書けば,

$$\frac{\partial}{\partial \nu_j} \log p(\boldsymbol{y}|\boldsymbol{\nu}) = -K\Sigma_{j,j} + K\nu_j - \sum_{k=1}^K \bar{x}_j(t_k)$$
(31)

 2 「統計的信号処理」の2.2節参照.

³証明は「信号処理のための線形代数入門」の問題 8.1 の解答を参照のこと

となる.ここで, $\bar{x}_j(t_k)$ はベクトル x_k の j 番目の要素である.したがって,上式の右辺をゼロと置くことにより ν_j の推定解として,

$$\widehat{\nu}_j = \Sigma_{j,j} + \frac{1}{K} \sum_{k=1}^K \bar{x}_j(t_k) \tag{32}$$

を得る(式 (32) は EM アルゴリズムを用いて導出した ν_j の推定解と同じものとなっている.詳しくは「ベイズ信号処理」の第5章参照.)式 (32) は推定が劣決定の場合(特にその度合いが激しい場合, すなわち M << N の場合)に収束が遅いことが知られている.次節では収束の早い ν の学習について述べる.

3.3.2 凸関数の性質を用いた v の学習

A. 代替コスト関数の導出

式 (32) よりも収束の早い更新式を凸関数の性質を用いて導出する (「ベイズ信号処理」5.5 節にここ で用いる手法についての解説がある.) コスト関数を式 (30) の周辺尤度を用いて

$$\mathcal{F}(\boldsymbol{\nu}) = -(2/K)\log p(\boldsymbol{y}|\boldsymbol{\nu}) = \log |\boldsymbol{\Sigma}_{y}| + \frac{1}{K} \sum_{k=1}^{K} \left[(\boldsymbol{y}_{k} - \boldsymbol{F}\bar{\boldsymbol{x}}_{k})^{T} \boldsymbol{\Sigma}_{\boldsymbol{\varepsilon}}^{-1} (\boldsymbol{y}_{k} - \boldsymbol{F}\bar{\boldsymbol{x}}_{k}) + \bar{\boldsymbol{x}}_{k}^{T} \boldsymbol{\Upsilon}^{-1} \bar{\boldsymbol{x}}_{k} \right]$$
(33)

と定義する.この $\mathcal{F}(\nu)$ を最小とする ν が ν のベストな推定解である.この最小化に際して, $\log |\Sigma_y|$ は変数 $\nu_1, \nu_2, \ldots, \nu_{3N}$ に関して上に凸な関数であるので,任意の ν に対して, z_0 をある定数として

$$\boldsymbol{z}^T \boldsymbol{\nu} - \boldsymbol{z}_0 \ge \log |\boldsymbol{\Sigma}_y| \tag{34}$$

を満たすベクトル $\mathbf{z} = [z_1, \dots, z_{3N}]^T$ が必ず存在するという事実を用いる.すなわち,代替コスト関数を

$$\widetilde{\mathcal{F}}(\boldsymbol{\nu}, \boldsymbol{z}) = \boldsymbol{z}^T \boldsymbol{\nu} - z_0 + \frac{1}{K} \sum_{k=1}^{K} \left[(\boldsymbol{y}_k - \boldsymbol{F} \bar{\boldsymbol{x}}_k)^T \boldsymbol{\Sigma}_{\boldsymbol{\varepsilon}}^{-1} (\boldsymbol{y}_k - \boldsymbol{F} \bar{\boldsymbol{x}}_k) + \bar{\boldsymbol{x}}_k^T \boldsymbol{\Upsilon}^{-1} \bar{\boldsymbol{x}}_k \right]$$
(35)

とすれば,

$$\widetilde{\mathcal{F}}(\boldsymbol{\nu}, \boldsymbol{z}) \ge \mathcal{F}(\boldsymbol{\nu}) \tag{36}$$

が成り立つので,代替コスト関数 $\widetilde{\mathcal{F}}(\nu, z)$ は真のコスト関数 $\mathcal{F}(\nu)$ の上限を形成する.すなわち,代 替コスト関数 $\widetilde{\mathcal{F}}(\nu, z)$ を補助変数 z と共に変数 ν で最小化すれば, $\widetilde{\mathcal{F}}(\nu, z)$ を最小化する ν は真の コスト関数をも最小化する.したがって, ν の最適推定値 $\hat{\nu}$ は代替コスト関数 $\widetilde{\mathcal{F}}(\nu, z)$ を最小とする ν として求めることができる.

B. ハイパーパラメータ νの推定式の導出

$$\widehat{\boldsymbol{\nu}} = \operatorname*{argmin}_{\boldsymbol{\nu}} \widetilde{\mathcal{F}}(\boldsymbol{\nu}, \boldsymbol{z}) = \operatorname*{argmin}_{\boldsymbol{\nu}} \left[\boldsymbol{z}^T \boldsymbol{\nu} + \frac{1}{K} \sum_{k=1}^K \bar{\boldsymbol{x}}_k^T \boldsymbol{\Upsilon}^{-1} \bar{\boldsymbol{x}}_k \right]$$
$$= \operatorname*{argmin}_{\boldsymbol{\nu}} \sum_{j=1}^N \left[z_j \nu_j + \frac{\frac{1}{K} \sum_{k=1}^K \bar{\boldsymbol{x}}_j^2(t_k)}{\nu_j} \right] \quad (37)$$

として求める.再右辺を v_jに関し微分してゼロと置けば,

$$\widehat{\nu}_j = \sqrt{\frac{\frac{1}{K} \sum_{k=1}^K \bar{x}_j^2(t_k)}{z_j}} \tag{38}$$

を得る.この式に示す $\hat{\nu}_j$ が ν_j の推定解である.しかし上式には,補助変数 z_j が入っている.補助 変数 z_j の推定値は (「ベイズ信号処理」5.5.2 項を参照のこと.)

$$\widehat{z}_j = \frac{\partial}{\partial \mu_j} \log |\boldsymbol{\Sigma}_y| \tag{39}$$

として求まる.ここで,

$$\frac{\partial}{\partial \mu_j} \log |\boldsymbol{\Sigma}_y| = \operatorname{tr} \left[\boldsymbol{\Sigma}_y^{-1} \frac{\partial}{\partial \mu_j} \boldsymbol{\Sigma}_y \right]$$
(40)

であり,式(21)から

$$\frac{\partial}{\partial \mu_j} \boldsymbol{\Sigma}_y = \frac{\partial}{\partial \mu_j} \boldsymbol{F} \boldsymbol{\Upsilon} \boldsymbol{F}^T = \boldsymbol{f}_j \boldsymbol{f}_j^T$$

であるので,

$$\widehat{z}_{j} = \operatorname{tr}\left[\boldsymbol{\Sigma}_{y}^{-1}\boldsymbol{f}_{j}\boldsymbol{f}_{j}^{T}\right] = \boldsymbol{f}_{j}^{T}\boldsymbol{\Sigma}_{y}^{-1}\boldsymbol{f}_{j}$$

$$\tag{41}$$

を得る.式 (38) および (41) が ν の更新式である.式 (38) に (41) を代入してして

$$\widehat{\nu}_j = \sqrt{\frac{\frac{1}{K} \sum_{k=1}^K \bar{x}_j^2(t_k)}{\boldsymbol{f}_j^T \boldsymbol{\Sigma}_y^{-1} \boldsymbol{f}_j}}$$
(42)

として ν の更新式を表すこともできる.

3.4 ハイパーパラメータ・タイイング

前節で述べたアルゴリズムには問題がある.ボクセルソースベクトルxのj番目の要素が $j = 3 \times n+1$ と表せれば,これはn番目のボクセルのx成分の値であり,この場合, $j = 3 \times n+2$ および $j = 3 \times n+3$ ば,n番目のボクセルのyおよびz成分の値である.このようにソースベクトルのインデックスjは異なる2つのインデックス(ボクセルのインデックスnと同じボクセルにおけるソースベクトルの3つの成分を表すインデックス)の和で表されるが,これまで述べてきたスパースベイズアルゴリズムはこの違いを考慮せず同等に扱うため,信号源の成分間でスパース制約が働いてしまい,信号源の向

きの推定に(その結果として信号源強度の推定にも)誤差を生じてしまう.したがって,このアルゴ リズムによる再構成結果は誤差を含む.この実例は付録B(Biomag2014の発表ポスター)を参照さ れたい.

この問題に対する解決策は同じボクセル由来のハイパーパラメータ ν_{3n+1} , ν_{3n+2} , ν_{3n+3} を結び付けて同じ1つの値を持つようにすることである.すなわち,それぞれの更新値 $\hat{\nu}_{3n+1}$, $\hat{\nu}_{3n+2}$, $\hat{\nu}_{3n+3}$ を用いて新しい更新値 $\hat{\mu}_{3n+m}$ (m = 1, 2, 3)を

$$\hat{\mu}_{3n+m} = \sqrt{\frac{1}{3} \sum_{i=1}^{3} \hat{\nu}_{3n+i}^2}$$
(43)

とすることにより, n 番目のボクセルのハイパーパラメータの値を3つの成分に関して同じ値にするのである.これを Hyperparameter Tying⁴と呼ぶ.

ハイパーパラメータを結合する,すなわち同じ値にしてしまうことによりパラメータ間のスパース制約をコントロールできる.すなわち,タイイングしたパラメータの間ではスパースな制約は消失するが,タイイングしていないパラメータの間ではスパースな制約が保たれる.ここで議論している式 (43)を用いた場合には,各ボクセルのソースベクトルの成分間ではスパース制約は消失するが,ボクセル間ではスパース制約はなお有効である⁵. Hyperparameter Tying がスパース制約に与える影響についてのコスト関数を使った議論は付録 B あるいは Electromagnetic Brain Imaging の 4.9 節に説明がある.また,補助変数 \hat{z}_i についても同様に

$$\hat{z}_{3n+m}^{new} = \frac{1}{3} \sum_{i=1}^{3} \hat{z}_{3n+i} \quad (m = 1, 2, 3)$$
(44)

とすることによりタイイングを行う.

このハイパーパラメータ・タイイングの有効性に関するコスト関数を用いた議論と実験結果を発表 したポスター(Biomag2014,Halifax, Canada)を付録 B に示す.ポスター6ページ目に,2次元デー タの場合におけるハイパーパラメータ・タイイングを行った場合と行わない場合のコスト関数の導出 を示す.また,ポスター7ページ目にコスト関数のプロットを示す.このプロットから,ハイパーパ ラメータ・タイイングを行なわない場合にはコスト関数が L_0 -あるいは L_1 -ノルムに類似のスパース な解を生ずるタイプの形状をしているが,ハイパーパラメータ・タイイングによってこの形状が L_2 -ノルムのコスト関数に類似したスパースな解を生じないタイプの形状に変化することが示される.

8ページから9ページにかけて,ハイパーパラメータ・タイイングの有効性を示すコンピュータシ ミュレーションとその結果を示す.9ページの結果は,(a)事前分布の共分散行列を対角行列とする 方法,(b)事前分布の共分散行列を対角行列として,ハイパーパラメータ・タイイングを行う方法, (c)事前分布の共分散行列を対角行列とする方法(A節に述べる方法)を比較し,(a)では再構成結 果に大きな誤差を含むが,(b)であれば誤差の無い再構成を得ることができる.また,(c)でも誤差 の無い再構成が可能であるが,計算時間が12倍(方法(b)と比べて)かかることが述べられている.

⁴ハイパーパラメータの結合とでも訳すべきか?

⁵ちなみにペイズミニマムノルム法はこの極端な場合である.この方法では全ボクセルのハイパーパラメータを結合し,1 つの値で表していると考えることができる.したがって,ベイズミニマムノルム法ではスパースな解は生じない.なお,ベイ ズミニマムノルム法については Electromagnetic Brain Imaging の2.10節,あるいは技術ノート(参考文献[5])を参照の こと.

3.5 ハイパーパラメータのスムージング

SBL アルゴリズムは理論的にはシングルタイムサンプルのデータに対しても有効なアルゴリズム である.しかし,実際にはある程度の数のタイムサンプルを必要とする.この,ある程度の数のタイ ムサンプルの必要性は式 (38)において明らかである.式 (38)において,ハイパーパラメータ ν_j の 更新式は *j* 番目のボクセルにおける再構成パワーの測定タイムタイムサンプルでの平均値

$$\frac{1}{K} \sum_{k=1}^{K} \bar{x}_j^2(t_k) \tag{45}$$

を用いて計算される.個々のタイムサンプルにおける値 $\bar{x}_{j}^{2}(t_{k})$ は観測データに混入するノイズの影響を受けるので,ある瞬時値ではなく,式 (45)に示すようにタイムタイムサンプルでの平均値を用いて ν_{j} の更新を行うことにより,観測データに混入するノイズに対しより安定な更新を行うことができる.

脳磁界計測以外の生体磁気では,少ないタイムサンプルでの信号源再構成を行わなければならな い場合も多い.例えば,脊髄や神経磁場の計測では信号源が高速で移動するため,通常はシングルタ イムサンプルで信号源再構成を行う.ハイパーパラメータのスムージングは,このような少数タイム サンプルを用いた再構成において少しでも安定した再構成を行うことを目的とする.

ハイパーパラメータスムージングは,式 (43)を用いて計算したハイパーパラメータの更新値 $\hat{\mu}$ (= [$\hat{\mu}_1, \ldots, \hat{\mu}_{3N}$)を,あるスムージング重み関数 Θ を用いて,

$$\widehat{\boldsymbol{\mu}}^{S} = \boldsymbol{\Theta} \widehat{\boldsymbol{\mu}} \tag{46}$$

としてスムージングを行うことにより求めた $\hat{\mu}^{s}$ を最終的な更新値として用いる.ハイパーパラメー タスムージングを行うことにより,少数タイムサンプルの場合においてもノイズの影響を含む更新値 を周囲のボクセルにおける重み付き平均を計算することにより,更新値に含まれるノイズの影響を低 減し,アルゴリズムの安定性の向上が期待できる.

4 ノイズの学習

ノイズ共分散行列をハイパーパラメータとみなせば,周辺尤度関数の最大化から,ノイズ共分散 行列も推定することができる.ノイズ共分散行列の推定をノイズ学習(noise learning)と呼ぶ.ノ イズ共分散行列の最適解は,周辺尤度を最大とするノイズ共分散行列として,すなわち

$$\frac{\partial}{\partial \boldsymbol{\Sigma}_{\boldsymbol{\varepsilon}}} \log p(\boldsymbol{y}|\boldsymbol{\nu}, \boldsymbol{\Sigma}_{\boldsymbol{\varepsilon}}) = \frac{\partial}{\partial \boldsymbol{\Sigma}_{\boldsymbol{\varepsilon}}} \sum_{k=1}^{K} \log p(\boldsymbol{y}_{k}|\boldsymbol{\nu}, \boldsymbol{\Sigma}_{\boldsymbol{\varepsilon}}) = 0$$
(47)

を満たす Σ_ε として求めることができる.ただし,この計算のためにはコスト関数を直接最大化する よりも EM アルゴリズムを用いて平均データ尤度を最大化する方が計算が楽である. ノイズ共分散行列 Σ_{ε} ではなく精度行列 Λ ($= \Sigma_{\varepsilon}^{-1}$)を用いて平均データ尤度を表すと,

$$\Theta(\boldsymbol{\Lambda}) = \sum_{k=1}^{K} E\left[\log p(\boldsymbol{y}_{k} | \boldsymbol{x}_{k}, \boldsymbol{\Lambda})\right] + \sum_{k=1}^{K} E\left[\log p(\boldsymbol{x}_{k} | \boldsymbol{\Upsilon})\right]$$
(48)

ここで, $E[\cdot]$ は事後分布の期待値を表す. Λ の更新値は

$$\frac{\partial}{\partial \boldsymbol{\Lambda}} \boldsymbol{\Theta}(\boldsymbol{\Lambda}) = \boldsymbol{0}$$

を満たす Λ である.式(48)において右辺第2項は Λ を含まずこの計算には関係しない.したがって,

$$\frac{\partial}{\partial \boldsymbol{\Lambda}} \boldsymbol{\Theta}(\boldsymbol{\Lambda}) = \sum_{k=1}^{K} E\left[\frac{\partial}{\partial \boldsymbol{\Lambda}} \log p(\boldsymbol{y}_k | \boldsymbol{x}_k, \boldsymbol{\Lambda})\right]$$
(49)

であり,

$$\log p(\boldsymbol{y}_k | \boldsymbol{x}_k, \boldsymbol{\Lambda}) = \frac{1}{2} \log |\boldsymbol{\Lambda}| - \frac{1}{2} (\boldsymbol{y}_k - \boldsymbol{F} \boldsymbol{x}_k)^T \boldsymbol{\Lambda} (\boldsymbol{y}_k - \boldsymbol{F} \boldsymbol{x}_k)$$
(50)

である.式(50)では計算に関係のない定数は書くのを省略した.ここで,

$$\frac{\partial}{\partial \boldsymbol{\Lambda}} \log p(\boldsymbol{y}_k | \boldsymbol{x}_k, \boldsymbol{\Lambda}) = \frac{1}{2} \boldsymbol{\Lambda}^{-1} - \frac{1}{2} (\boldsymbol{y}_k - \boldsymbol{F} \boldsymbol{x}_k) (\boldsymbol{y}_k - \boldsymbol{F} \boldsymbol{x}_k)^T$$
(51)

であるので,

$$\frac{\partial}{\partial \boldsymbol{\Lambda}} \boldsymbol{\Theta}(\boldsymbol{\Lambda}) = \frac{K}{2} \boldsymbol{\Lambda}^{-1} - \frac{1}{2} \sum_{k=1}^{K} E\left[(\boldsymbol{y}_k - \boldsymbol{F} \boldsymbol{x}_k) (\boldsymbol{y}_k - \boldsymbol{F} \boldsymbol{x}_k)^T \right]$$
(52)

を得る.さらに,

$$E\left[(\boldsymbol{y}_{k}-\boldsymbol{F}\boldsymbol{x}_{k})(\boldsymbol{y}_{k}-\boldsymbol{F}\boldsymbol{x}_{k})^{T}\right] = (\boldsymbol{y}_{k}-\boldsymbol{F}\bar{\boldsymbol{x}}_{k})(\boldsymbol{y}_{k}-\boldsymbol{F}\bar{\boldsymbol{x}}_{k})^{T} + \boldsymbol{F}\boldsymbol{\Gamma}^{-1}\boldsymbol{F}^{T}$$
(53)

であるので,結局, Λ すなわち Σ_{ε} の更新式として

$$\widehat{\boldsymbol{\Sigma}}_{\boldsymbol{\varepsilon}} = \widehat{\boldsymbol{\Lambda}}^{-1} = \frac{1}{K} \sum_{k=1}^{K} (\boldsymbol{y}_k - \boldsymbol{F}\bar{\boldsymbol{x}}_k) (\boldsymbol{y}_k - \boldsymbol{F}\bar{\boldsymbol{x}}_k)^T + \boldsymbol{F}\boldsymbol{\Gamma}^{-1}\boldsymbol{F}^T$$
(54)

を得る.

式 (54) をそのまま使うのではなく,計算しやすいように変形する.式 (54)の右辺第1項は式 (22) を用いれば

$$\frac{1}{K}\sum_{k=1}^{K} (\boldsymbol{y}_{k} - \boldsymbol{F}\bar{\boldsymbol{x}}_{k})(\boldsymbol{y}_{k} - \boldsymbol{F}\bar{\boldsymbol{x}}_{k})^{T} = \frac{1}{K}\sum_{k=1}^{K} (\boldsymbol{y}_{k} - \boldsymbol{F}\boldsymbol{\Omega}\boldsymbol{y}_{k})(\boldsymbol{y}_{k} - \boldsymbol{F}\boldsymbol{\Omega}\boldsymbol{y}_{k})^{T} = \boldsymbol{\Pi}\boldsymbol{R}_{yy}\boldsymbol{\Pi}^{T}$$
(55)

である.ここで

$$\boldsymbol{\Pi} = \boldsymbol{I} - \boldsymbol{F}\boldsymbol{\Omega} = \boldsymbol{I} - \boldsymbol{F}\boldsymbol{\Upsilon}\boldsymbol{F}^T\boldsymbol{\Sigma}_y^{-1}$$
(56)

$$\boldsymbol{R}_{yy} = \frac{1}{K} \sum_{k=1}^{K} \boldsymbol{y}_k \boldsymbol{y}_k^T$$
(57)

である.

式 (54)の右辺第 2 項については , まず , Γ^{-1} (式 (18))を以下のように変形する . Γ^{-1} は , 逆行 列公式より ,

$$\boldsymbol{\Gamma}^{-1} = \left(\boldsymbol{\Upsilon}^{-1} + \boldsymbol{F}^T \boldsymbol{\Sigma}_{\boldsymbol{\varepsilon}}^{-1} \boldsymbol{F}\right)^{-1} = \boldsymbol{\Upsilon} - \boldsymbol{\Upsilon} \boldsymbol{F}^T (\boldsymbol{\Lambda} + \boldsymbol{F} \boldsymbol{\Upsilon} \boldsymbol{F}^T)^{-1} \boldsymbol{F} \boldsymbol{\Upsilon} = \boldsymbol{\Upsilon} - \boldsymbol{\Upsilon} \boldsymbol{F}^T \boldsymbol{\Sigma}_y^{-1} \boldsymbol{F} \boldsymbol{\Upsilon}$$
(58)

を得る.したがって,式(54)の右辺第2項は

$$\boldsymbol{F}\boldsymbol{\Gamma}^{-1}\boldsymbol{F}^{T} = \boldsymbol{F}\left(\boldsymbol{\Upsilon} - \boldsymbol{\Upsilon}\boldsymbol{F}^{T}\boldsymbol{\Sigma}_{y}^{-1}\boldsymbol{F}\boldsymbol{\Upsilon}\right)\boldsymbol{F}^{T} = \boldsymbol{F}\boldsymbol{\Upsilon}\boldsymbol{F}^{T} - \boldsymbol{F}\boldsymbol{\Upsilon}\boldsymbol{F}^{T}\boldsymbol{\Sigma}_{y}^{-1}\boldsymbol{F}\boldsymbol{\Upsilon}\boldsymbol{F}^{T}$$
$$= \left(\boldsymbol{I} - \boldsymbol{F}\boldsymbol{\Upsilon}\boldsymbol{F}^{T}\boldsymbol{\Sigma}_{y}^{-1}\right)\boldsymbol{F}\boldsymbol{\Upsilon}\boldsymbol{F}^{T} = (\boldsymbol{I} - \boldsymbol{F}\boldsymbol{\Omega})\boldsymbol{F}\boldsymbol{\Upsilon}\boldsymbol{F}^{T} = \boldsymbol{\Pi}\boldsymbol{F}\boldsymbol{\Upsilon}\boldsymbol{F}^{T} \quad (59)$$

となるので,結局, Σ_{ε} の更新式(54)は

$$\widehat{\boldsymbol{\Sigma}}_{\boldsymbol{\varepsilon}} = \boldsymbol{\Pi} \boldsymbol{R}_{yy} \boldsymbol{\Pi}^T + \boldsymbol{\Pi} \boldsymbol{F} \boldsymbol{\Upsilon} \boldsymbol{F}^T \tag{60}$$

と表される.通常は ε を対角ノイズ (diagonal noise) と仮定しているので, Σ_{ε} を対角行列として, 更新式は

$$\widehat{\boldsymbol{\Sigma}}_{\boldsymbol{\varepsilon}} = \operatorname{diag} \left[\boldsymbol{\Pi} \boldsymbol{R}_{yy} \boldsymbol{\Pi}^{T} + \boldsymbol{\Pi} \boldsymbol{F} \boldsymbol{\Upsilon} \boldsymbol{F}^{T} \right]$$
(61)

となる6.

5 SBL ビームフォーミング

SBL ビームフォーミングは SBL アルゴリズムから出力されたモデルデータ共分散行列 *Σ*_yを用いてビームフォーマーを構成する信号源再構成手法である.従来のビームフォーマーは,サンプルデータ共分散行列 *R* を用いて構成した重み行列:

$$\boldsymbol{W}(\boldsymbol{r}) = \boldsymbol{R}^{-1} \boldsymbol{L}(\boldsymbol{r}) \left[\boldsymbol{L}^{T}(\boldsymbol{r}) \boldsymbol{R}^{-1} \boldsymbol{L}(\boldsymbol{r}) \right]^{-1}$$
(62)

を用いて,位置rにおけるソースベクトルを

$$\widehat{\boldsymbol{s}}(\boldsymbol{r},t) = \boldsymbol{W}^{T}(\boldsymbol{r})\boldsymbol{y}(t) = \left[\boldsymbol{L}^{T}(\boldsymbol{r})\boldsymbol{R}^{-1}\boldsymbol{L}(\boldsymbol{r})\right]^{-1}\boldsymbol{L}^{T}(\boldsymbol{r})\boldsymbol{R}^{-1}\boldsymbol{y}(t)$$
(63)

として推定する.SBL ビームフォーミングは,サンプル共分散行列 R の代わりに,SBL アルゴリズ ムの出力として求まるモデルデータ共分散行列 Sy を用いて重み行列

$$\boldsymbol{W}(\boldsymbol{r}) = \boldsymbol{\Sigma}_{y}^{-1} \boldsymbol{L}(\boldsymbol{r}) \left[\boldsymbol{L}^{T}(\boldsymbol{r}) \boldsymbol{\Sigma}_{y}^{-1} \boldsymbol{L}(\boldsymbol{r}) \right]^{-1}$$
(64)

を求め,位置rにおけるソースベクトルを

$$\widehat{\boldsymbol{s}}(\boldsymbol{r},t) = \boldsymbol{W}^{T}(\boldsymbol{r})\boldsymbol{y}(t) = \left[\boldsymbol{L}^{T}(\boldsymbol{r})\boldsymbol{\Sigma}_{y}^{-1}\boldsymbol{L}(\boldsymbol{r})\right]^{-1}\boldsymbol{L}^{T}(\boldsymbol{r})\boldsymbol{\Sigma}_{y}^{-1}\boldsymbol{y}(t)$$
(65)

 6 ここで,行列をAとして $B = ext{diag}(A)$ とは, $^{\prime}A$ の対角成分を対角成分に持つ対角行列をBとする」の意味である.



図 1: RENSx アルゴリズムの流れ.ベクトル σ はノイズ共分散行列 Σ_{ε} の対角成分を要素に持つ列 ベクトルであり, $\Sigma_{\varepsilon} = diag(\sigma)$ の関係がある.

と推定する.

SBL ビームフォーマーは次の2つの点で,従来のビームフォーマーよりも優れている.サンプル 共分散行列 R を精度良く求めるためには多数のタイムサンプル(すなわち大きな K の値)を必要と する.そのため,従来のビームフォーマーは多数のタイムサンプルを含むデータ時間窓を必要とす る.これがためにビームフォーマーは多数のタイムサンプルを含むデータ時間窓を確保できない計測 データ,例えば誘発脳磁界データなどにはあまり用いられることはなかった.一方で,SBL アルゴリ ズムによるモデルデータ共分散行列の推定ではこのような制約は存在せず,少数のタイムサンプルか らもモデルデータ共分散行列の推定が可能である.

さらに,ビームフォーマーには複数の信号源活動に時間的な相関があると信号源推定結果に大き な誤差を生じることが知られている.これは,データサンプル共分散行列が信号源相関の影響を大き く受け,その信号およびノイズ部分空間が縮退してしまうためである.一方,SBL アルゴリズムに より求まるモデルデータ共分散行列は信号源活動の相関には影響を受けなため,信号源活動に大き な相関があっても信号源活動の情報を保ったモデルデータ共分散行列の推定が可能である. 付録 C に SBL ビームフォーマーに関する実験結果を発表したポスター(Biomag2016,Soeul,Korea) を示す.このポスターは特に SBL ビームフォーマーの multi-resolution capability に関するコンピュー タシミュレーションの報告であり,low-resolution ボクセル(ボクセル間隔:15mm)でモデルデー タ共分散行列を求め,high-resolution ボクセル(ボクセル間隔:2mm)でビームフォーマ再構成を 行うことで,low-resolution ボクセルでの再構成よりはるかに高分解能の再構成結果を得ることがで きることを報告している.

6 RENSx アルゴリズム - まとめ

RENSx アルゴリズムを図1にまとめた.RENSx アルゴリズムはまず SBL アルゴリズムを実行する.この部分では,まずハイパーパラメータ $\nu \ge \sigma$ に初期値を与える.ここで, σ はノイズ共分散行列 Σ_{ϵ} の対角成分を要素に持つ列ベクトルであり,ノイズ共分散行列は $\Sigma_{\epsilon} = diag(\sigma) \ge 0$ て求める.次に, $\nu \ge \Sigma_{\epsilon}$ を用いて事後平均 \bar{x}_k (k = 1, ..., K)を求める.さらに,この \bar{x}_k を用いて, $\nu \ge \Sigma_{\epsilon}$ を更新する.以上の手順をある条件が満たされるまで行う.SBL アルゴリズムの出力は事後平均 \bar{x}_k (k = 1, ..., K) とモデルデータ共分散行列 Σ_y (式 (21))である.RENSx アルゴリズムにおいでは,SBL アルゴリズムの出力であるモデルデータ共分散行列 Σ_y を用いて SBL ビームフォー ミングを行う.アルゴリズムの最終的な出力は SBL から出力される SBL ボクセルタイムコース \bar{x}_k (k = 1, ..., K) と,ビームフォーマーの出力 \bar{x}_k (k = 1, ..., K)である.

7 参考文献

以下に SBL アルゴリズムの説明がある.

- 1. Electromagnetic Brain Imaging, Springer 2015.
- 2. ベイズ信号処理,共立出版 2015.
- 3. 信号処理のための線形代数入門, 2019.
- シグナルアナリシス社技術資料「スパースベイズ推定」 http://www.signalanalysis.jp/pdfs/SBL_note.pdf
- 5. シグナルアナリシス社技術資料「ベイズミニマムノルム推定」 http://www.signalanalysis.jp/pdfs/BMN_note.pdf

A.1 確率モデルと学習測

本ノートの3節で述べた SBL アルゴリズムは各ボクセルの共分散行列をスカラー倍の単位行列に 仮定したおり,スカラータイプのSBL アルゴリズムと呼ばれる.これに対し,ボクセル共分散行列 に特別な仮定を置かないSBL アルゴリズムを構築することも可能である.このアルゴリズムは(い わば)マトリックスタイプのSBL アルゴリズムであり,matrix champagne と呼ばれる.

このアルゴリズムでは各ボクセルにおける j 番目のソース $s(r_j,t)$ に対して事前分布を,

$$p(\boldsymbol{s}_j(t)) = \mathcal{N}(\boldsymbol{s}_j(t)|\boldsymbol{0},\boldsymbol{\Upsilon}_j)$$
(66)

とする.簡単のため $s(r_j,t)$ を $s_j(t)$ と書いた.ここで,共分散行列 Υ_j は 3×3 の行列である.各 ボクセルにおけるソースベクトル $s_j(t)$ は (固定の)任意の向きを取りえるので対角行列と仮定はできない.したがって,ボクセルベクトル x_k に対する事前分布は

$$p(\boldsymbol{x}_k|\boldsymbol{\Upsilon}) = \prod_{j=1}^N \mathcal{N}(\boldsymbol{s}_j(t_k)|0,\boldsymbol{\Upsilon}_j) = \mathcal{N}(\boldsymbol{x}_k|\boldsymbol{0},\boldsymbol{\Upsilon})$$
(67)

で表される.ボクセルベクトルの事前共分散行列 Υ は $3N \times 3N$ のブロック対角行列で

$$\boldsymbol{\Upsilon} = \begin{bmatrix} \boldsymbol{\Upsilon}_1 & 0 & \cdots & 0 \\ 0 & \boldsymbol{\Upsilon}_2 & \cdots & 0 \\ \vdots & 0 & \ddots & \vdots \\ 0 & 0 & \cdots & \boldsymbol{\Upsilon}_N \end{bmatrix}.$$
(68)

と表される.

この事前分布と式(12)のノイズの仮定のもとで,事後分布の平均はやはり

$$\bar{\boldsymbol{x}}_k = \boldsymbol{\Upsilon} \boldsymbol{F}^T \boldsymbol{\Sigma}_y^{-1} \boldsymbol{y}_k \tag{69}$$

と求まる.個々のボクセルにおけるソースベクトルの事後平均は

$$\bar{\boldsymbol{s}}_{j}(t_{k}) = \boldsymbol{\Upsilon}_{j} \boldsymbol{L}_{j}^{T} \boldsymbol{\Sigma}_{y}^{-1} \boldsymbol{y}_{k}$$
(70)

である.ここで,モデルデータ共分散行列 Σ_y は

$$\boldsymbol{\Sigma}_{y} = \boldsymbol{\Sigma}_{\boldsymbol{\varepsilon}} + \sum_{j=1}^{N} \boldsymbol{L}_{j} \boldsymbol{\Upsilon}_{j} \boldsymbol{L}_{j}^{T}$$
(71)

である.ただし, $L_j = L(r_j)$ と書いた.

式 (33) に対応したコスト関数は

$$\mathcal{F}(\boldsymbol{\Upsilon}) = -(2/K)\log p(\boldsymbol{y}|\boldsymbol{\Upsilon})$$
$$= \log |\boldsymbol{\Sigma}_{\boldsymbol{y}}| + \frac{1}{K} \sum_{k=1}^{K} \left[(\boldsymbol{y}_{k} - \boldsymbol{F}\bar{\boldsymbol{x}}_{k})^{T} \boldsymbol{\Sigma}_{\boldsymbol{\varepsilon}}^{-1} (\boldsymbol{y}_{k} - \boldsymbol{F}\bar{\boldsymbol{x}}_{k}) + \sum_{j=1}^{N} \bar{\boldsymbol{s}}_{j}^{T} (t_{k}) \boldsymbol{\Upsilon}_{j}^{-1} \bar{\boldsymbol{s}}_{j} (t_{k}) \right]$$
(72)

である.ここで,式(34)に対応して,

$$\sum_{j=1}^{N} \operatorname{tr}\left(\boldsymbol{Z}_{j}^{T}\boldsymbol{\Upsilon}_{j}\right) - Z_{0} \ge \log |\boldsymbol{\Sigma}_{y}|$$
(73)

を満たす 3×3 の行列 Z_j (j = 1, ..., N) が必ず存在する.したがって,代替コスト関数を以下のように定義すれば⁷

$$\widetilde{\mathcal{F}}(\boldsymbol{\Upsilon}, \boldsymbol{Z}) = \frac{1}{K} \sum_{k=1}^{K} \left[(\boldsymbol{y}_{k} - \boldsymbol{F}\bar{\boldsymbol{x}}_{k})^{T} \boldsymbol{\Sigma}_{\boldsymbol{\varepsilon}}^{-1} (\boldsymbol{y}_{k} - \boldsymbol{F}\bar{\boldsymbol{x}}_{k}) + \sum_{j=1}^{N} \bar{\boldsymbol{s}}_{j}^{T} (t_{k}) \boldsymbol{\Upsilon}_{j}^{-1} \bar{\boldsymbol{s}}_{j} (t_{k}) \right] + \sum_{j=1}^{N} \operatorname{tr} \left(\boldsymbol{Z}_{j}^{T} \boldsymbol{\Upsilon}_{j} \right) - Z_{0} \quad (74)$$

このコスト関数は必ず

$$\widetilde{\mathcal{F}}(\boldsymbol{\Upsilon}, \boldsymbol{Z}) \geq \mathcal{F}(\boldsymbol{\Upsilon})$$

であり, $\widetilde{\mathcal{F}}(\mathbf{\Upsilon}, \mathbf{Z})$ を $\mathbf{\Upsilon}$ と \mathbf{Z} で最小化すれば,その $\mathbf{\Upsilon}$ は必ず $\mathcal{F}(\mathbf{\Upsilon})$ も最小化する.

ハイパーパラメータ $Z_j \geq vUp_j$ の更新式は以下のように導出される (これらの導出は Electromagnetic Brain Imaging の 4.8 節にある .) ハイパーパラメータ Z_j の更新式は

$$\widehat{\boldsymbol{Z}}_{j} = \frac{\partial}{\partial \boldsymbol{\Upsilon}_{j}} \log |\boldsymbol{\Sigma}_{y}| \tag{75}$$

から求まり,右辺の計算を行うと

$$\widehat{\boldsymbol{Z}}_{j} = \boldsymbol{L}_{j}^{T} \boldsymbol{\Sigma}_{y}^{-1} \boldsymbol{L}_{j}$$
(76)

である.また, $\boldsymbol{\Upsilon}_j$ の更新式は

$$\widehat{\boldsymbol{\Upsilon}}_{j} = \operatorname*{argmin}_{\boldsymbol{\Upsilon}_{j}} \left[\frac{1}{K} \sum_{k=1}^{K} \bar{\boldsymbol{s}}_{j}^{T}(t_{k}) \boldsymbol{\Upsilon}_{j}^{-1} \bar{\boldsymbol{s}}_{j}(t_{k}) + \operatorname{tr}\left(\boldsymbol{Z}_{j}^{T} \boldsymbol{\Upsilon}_{j}\right) \right]$$
(77)

から求まる.右辺の最小値を与える Z_j は

$$\widehat{\boldsymbol{\Upsilon}}_{j} = \boldsymbol{Z}_{j}^{-1/2} \left[\boldsymbol{Z}_{j}^{1/2} \left[\frac{1}{K} \sum_{k=1}^{K} \bar{\boldsymbol{s}}_{j}(t_{k}) \bar{\boldsymbol{s}}_{j}^{T}(t_{k}) \right] \boldsymbol{Z}_{j}^{1/2} \right]^{1/2} \boldsymbol{Z}_{j}^{-1/2}$$
(78)

 ${}^7 Z_1, \ldots, Z_N$ をまとめて Z す .

と求まる.

ここで述べた matrix champagne はボクセル共分散構造に特別な仮定を置かない,言ってみれば 理論的には正統な SBL アルゴリズムであるが,第3.3.2節で述べたスカラータイプの SBL アルゴリ ズムに対して,明らかにアルゴリズムが複雑(スカラー計算が行列計算になる等)になり,その分計 算時間を必要とする⁸.その一方で(理論的な正当性はともかく)実用的にはスカラータイプの SBL アルゴリズムに対して特段の利点は見当たらない.

A.2 Hyperparameter Tying のマトリックス SBL からの導出

マトリックスタイプの SBL はボクセルの共分散構造に何の仮定も置かないで導かれるアルゴリズム である.それでは,ボクセルの共分散行列をスカラーと仮定し,第3.4節で導入した Hyperparameter Tying と等価な式が更新式として導かれることを示す.

まず,ボクセルベクトルの事前共分散行列 Y は 3N × 3N のブロック対角行列で

$$\boldsymbol{\Upsilon} = \begin{bmatrix} \mu_1 \boldsymbol{I}_3 & 0 & \cdots & 0 \\ 0 & \mu_2 \boldsymbol{I}_3 & \cdots & 0 \\ \vdots & 0 & \ddots & \vdots \\ 0 & 0 & \cdots & \mu_N \boldsymbol{I}_3 \end{bmatrix}.$$
(79)

と仮定する.ここで, I_3 は 3×3 の単位行列を表す.各ボクセルのソースベクトル $s_j(t)$ の事後平均は,したがって,

$$\bar{\boldsymbol{s}}_{j}(t_{k}) = \mu_{j} \boldsymbol{L}_{j}^{T} \boldsymbol{\Sigma}_{y}^{-1} \boldsymbol{y}_{k}$$

$$\tag{80}$$

となる.モデルデータ共分散行列は,この場合,

$$\boldsymbol{\Sigma}_{y} = \boldsymbol{\Sigma}_{\boldsymbol{\varepsilon}} + \sum_{j=1}^{N} \mu_{j} \boldsymbol{L}_{j} \boldsymbol{L}_{j}^{T}$$
(81)

である.

したがって,コスト関数は

$$\mathcal{F}(\mu_1,\ldots,\mu_N) =$$

$$= \log |\boldsymbol{\Sigma}_{y}| + \frac{1}{K} \sum_{k=1}^{K} \left[(\boldsymbol{y}_{k} - \boldsymbol{F}\bar{\boldsymbol{x}}_{k})^{T} \boldsymbol{\Sigma}_{\boldsymbol{\varepsilon}}^{-1} (\boldsymbol{y}_{k} - \boldsymbol{F}\bar{\boldsymbol{x}}_{k}) + \sum_{j=1}^{N} \mu_{j}^{-1} \bar{\boldsymbol{s}}_{j}^{T} (t_{k}) \bar{\boldsymbol{s}}_{j} (t_{k}) \right] \quad (82)$$

となる.式 (73) に $\boldsymbol{\Upsilon}_{j} = \mu_{j} \boldsymbol{I}_{3}$ と $\boldsymbol{Z}_{j} = z_{j} \boldsymbol{I}_{3}$ を代入すれば,

$$\sum_{j=1}^{N} z_j \mu_j - Z_0 = \boldsymbol{z}^T \boldsymbol{\mu} - Z_0 \ge \log |\boldsymbol{\Sigma}_y|$$
(83)

⁸以前の検討では計算時間はスカラーアルゴリズムに比べ 10 倍程度必要であった.

の関係を満たす.ここで, $z = [z_1, \dots, z_N]$ および $\mu = [\mu_1, \dots, \mu_N]$ とした.したがって,代替コスト関数を

$$\widetilde{\mathcal{F}}(\boldsymbol{\mu}, \boldsymbol{z}) = \boldsymbol{z}^{T} \boldsymbol{\mu} - Z_{0} + \frac{1}{K} \sum_{k=1}^{K} \left[(\boldsymbol{y}_{k} - \boldsymbol{F} \bar{\boldsymbol{x}}_{k})^{T} \boldsymbol{\Sigma}_{\boldsymbol{\varepsilon}}^{-1} (\boldsymbol{y}_{k} - \boldsymbol{F} \bar{\boldsymbol{x}}_{k}) + \sum_{j=1}^{N} \mu_{j}^{-1} \bar{\boldsymbol{s}}_{j}^{T} (t_{k}) \bar{\boldsymbol{s}}_{j} (t_{k}) \right]$$
(84)

とすれば,やはり,

$$\widetilde{\mathcal{F}}(\boldsymbol{\mu}, \boldsymbol{z}) \ge \mathcal{F}(\boldsymbol{\nu})$$
 (85)

が成り立つので, $\widetilde{\mathcal{F}}(\mu, z)$ を最小とする $\mu = [\mu_1, \dots, \mu_N]$ は真のコスト関数 $\mathcal{F}(\mu_1, \dots, \mu_N)$ を最小とする.

実際, $\widetilde{\mathcal{F}}(\mu,z)$ を最小とする μ は

$$\widehat{\boldsymbol{\mu}} = \underset{\boldsymbol{\mu}}{\operatorname{argmin}} \widetilde{\mathcal{F}}(\boldsymbol{\mu}, \boldsymbol{z}) = \underset{\boldsymbol{\mu}}{\operatorname{argmin}} \left[\boldsymbol{z}^T \boldsymbol{\mu} + \frac{1}{K} \sum_{k=1}^K \sum_{j=1}^N \mu_j^{-1} \bar{\boldsymbol{s}}_j^T(t_k) \bar{\boldsymbol{s}}_j(t_k) \right]$$

として求める.

$$\frac{\partial}{\partial \mu_j} \widetilde{\mathcal{F}}(\boldsymbol{\mu}, \boldsymbol{z}) = z_j - \mu_j^{-2} \frac{1}{K} \sum_{k=1}^K \bar{\boldsymbol{s}}_j^T(t_k) \bar{\boldsymbol{s}}_j(t_k) = 0$$

より, $ar{s}_j(t_k) = [ar{s}^x_j(t_k), ar{s}^y_j(t_k), ar{s}^z_j(t_k)]$ とすれば,結局,

$$\widehat{\mu}_{j} = \sqrt{\frac{\frac{1}{K} \sum_{k=1}^{K} \bar{\boldsymbol{s}}_{j}^{T}(t_{k}) \bar{\boldsymbol{s}}_{j}(t_{k})}{z_{j}}} = \sqrt{\frac{\frac{1}{K} \sum_{k=1}^{K} \left[\bar{\boldsymbol{s}}_{j}^{x}(t_{k})^{2} + \bar{\boldsymbol{s}}_{j}^{y}(t_{k})^{2} + \bar{\boldsymbol{s}}_{j}^{z}(t_{k})^{2} \right]}{z_{j}}}$$
(86)

を得る.また, $\widetilde{\mathcal{F}}(\mu,z)$ を最小とするzは式(39)から求まる.式(81)から

$$\frac{\partial}{\partial \mu_j} \boldsymbol{\Sigma}_y = \boldsymbol{L}_j \boldsymbol{L}_j^T$$

であるので,式(40)を用いて,

$$\widehat{z}_{j} = \operatorname{tr}\left[\boldsymbol{\Sigma}_{y}^{-1}\boldsymbol{L}_{j}\boldsymbol{L}_{j}^{T}\right] = \operatorname{tr}\left[\boldsymbol{L}_{j}^{T}\boldsymbol{\Sigma}_{y}^{-1}\boldsymbol{L}_{j}\right] = (\boldsymbol{l}_{j}^{x})^{T}\boldsymbol{\Sigma}_{y}^{-1}\boldsymbol{l}_{j}^{x} + (\boldsymbol{l}_{j}^{y})^{T}\boldsymbol{\Sigma}_{y}^{-1}\boldsymbol{l}_{j}^{y} + (\boldsymbol{l}_{j}^{z})^{T}\boldsymbol{\Sigma}_{y}^{-1}\boldsymbol{l}_{j}^{z}$$
(87)

を得る.ここで, $L_j = \left[l_j^x, l_j^y, l_j^z
ight]$ とした.式 (86) に (87) を代入して,結局

$$\widehat{\nu}_{j} = \sqrt{\frac{\frac{1}{K} \sum_{k=1}^{K} \left[\bar{s}_{j}^{x}(t_{k})^{2} + \bar{s}_{j}^{y}(t_{k})^{2} + \bar{s}_{j}^{z}(t_{k})^{2}\right]}{(\boldsymbol{l}_{j}^{x})^{T} \boldsymbol{\Sigma}_{y}^{-1} \boldsymbol{l}_{j}^{x} + (\boldsymbol{l}_{j}^{y})^{T} \boldsymbol{\Sigma}_{y}^{-1} \boldsymbol{l}_{j}^{y} + (\boldsymbol{l}_{j}^{z})^{T} \boldsymbol{\Sigma}_{y}^{-1} \boldsymbol{l}_{j}^{z}}}$$
(88)

と求まる.式 (88) がハイパーパラメータ ν_j の更新式である.

本節で述べた式 (86) は式 (43) と,式 (88) は式 (44) と同じものであり,結局,3.4 節で導入した Hyperparameter tying を, ア を式 (79) と仮定することにより,matrix タイプの SBL から導いたこ とになる. Hyperparameter tyingに関する発表 Biomag2014におけるポスター



Hyper-parameter tying: a novel method of controlling the sparsity in sparse Bayes source imaging (Champagne) algorithm

<u>Sekihara K.</u>¹ Nagarajan S. S.²

¹ Department of Systems Design and Engineering, Tokyo Metropolitan University, Hino, Tokyo 191-0065, Japan.

²Biomagnetic Imaging Laboratory, Department of Radiology, University of California, San Francisco, 513 Parnassus Avenue, S362, San Francisco, CA 94143, USA

Summary: Part I

The sparse Bayes source imaging (Champagne) algorithm has proven to be effective for neuromagnetic imaging [1]. The method produces sparse solutions because a sparsity constraint is integrated in its cost function. However, there are some occasions where the sparsity constraint rather leads to wrong solutions. One such occasion is the estimation of voxel source orientations.

In Champagne algorithm, when the voxel source orientation is known, a diagonal covariance matrix can be used for the Gaussian prior distribution, and this leads to a simple and efficient algorithm. When the voxel source orientation is unknown, a block-diagonal covariance matrix must be used, which prevents from the sparsity constraint being imposed on each component of a source vector. However, the use of such a non-diagonal covariance matrix leads to an algorithm that is significantly complex and computationally expensive.

Summary: Part II

In this paper, we propose a simple method to overcome this difficulty, called the hyper-parameter tying. The proposed method can use a diagonal covariance matrix even when the source orientation is unknown. However, in each step of updating iteration, the source variance parameters of vector components are tied together to correctly estimate the source orientation.

Since a diagonal covariance matrix is used, the algorithm keeps the simplicity and computational efficiency. We discuss why the hyper-parameter tying can control the sparsity by presenting the cost function analysis of the Champagne algorithm[2]. References

Reference

- [1] Wipf DP, Owen JP, Attias HT, Sekihara K, Nagarajan SS., Neuroimage. 2010; 49(1) :641-55.
- [2] Wipf DP, Nagarajan SS, Advances in Neural Information Processing Systems, 2008

Sparse Bayes source imaging (Champagne) algorithm

Data model:
$$y = Fx + \varepsilon$$

Probability model: $p(y | x) = N(y | Fx, \sigma^2 I)$
 $p(x) = N(x | 0, \Upsilon)$

Covariance matrix of the prior distribution

$$\boldsymbol{\Upsilon} = \operatorname{diag}[\boldsymbol{\nu}, \boldsymbol{\nu}, \dots, \boldsymbol{\nu}] \quad \Longrightarrow \quad \hat{\boldsymbol{x}} = \operatorname{arg\,min} F(\boldsymbol{x}) : F(\boldsymbol{x}) = \frac{1}{\sigma^2} \|\boldsymbol{y} - \boldsymbol{H}\boldsymbol{x}\|^2 + \frac{1}{\nu} \|\boldsymbol{x}\|^2$$

L2 regularized minimum-norm method

Champagne algorithm

When voxel orientation is unknown:

$$\boldsymbol{F} = [\dots, \boldsymbol{l}_x(\boldsymbol{r}_j), \boldsymbol{l}_y(\boldsymbol{r}_j), \boldsymbol{l}_z(\boldsymbol{r}_j), \dots]$$

lead field for the *j*th voxel

$$\boldsymbol{\Upsilon} = \operatorname{diag}[\boldsymbol{\nu}_1, \boldsymbol{\nu}_2, \dots, \boldsymbol{\nu}_N]$$

Leading to the shrinkage over the source vector components.

 $\boldsymbol{\Upsilon} = \operatorname{diag}[\boldsymbol{\Upsilon}_1, \boldsymbol{\Upsilon}_2, \dots, \boldsymbol{\Upsilon}_N] \Longrightarrow$ $\boldsymbol{\Upsilon}_j : 3 \times 3 \text{ submatrix}$

Leading to a computer-intensive, slow algorithm, called the matrix champagne.

Hyperparameter tying:

$$\boldsymbol{\Upsilon} = \operatorname{diag}[\dots, \underbrace{\boldsymbol{\nu}_{3j+1}, \boldsymbol{\nu}_{3j+2}, \boldsymbol{\nu}_{3j+3}}_{\text{hyperparameters for the } j \text{th voxel}}, \dots]$$

Set the same update value such as $\hat{v}_j = (1/3) \sum_{m=1}^{3} v_{3j+m}$ to $v_{3j+1}, v_{3j+2}, v_{3j+3}$ **Cost function for sparse Bayes source imaging (Champagne algorithm)**

$$\hat{\boldsymbol{x}} = \arg\min F(\boldsymbol{x}) : F(\boldsymbol{x}) = \frac{1}{\sigma^2} \|\boldsymbol{y} - \boldsymbol{H}\boldsymbol{x}\|^2 + \phi(\boldsymbol{x})$$
$$\phi(\boldsymbol{x}) = \min_{\boldsymbol{y}} (\boldsymbol{x}^T \boldsymbol{\Upsilon}^{-1} \boldsymbol{x} + \log |\boldsymbol{\Sigma}|)$$

If we assume that the columns of H are orthogonal,

$$\log |\boldsymbol{\Sigma}| = \sum_{j=1}^{N} \log(\sigma^2 + v_j)$$

2-dimensional case

$$\begin{split} \phi(x_1, x_2) &= \min_{v_1, v_2} \sum_{j=1}^2 \left(\frac{x_j^2}{v_j} + \log(\sigma^2 + v_j) \right) \\ &= \sum_{j=1}^2 \left[\frac{2 |x_j|}{\sqrt{x_j^2 + 4\sigma^2} + |x_j|} + \log\left(\sigma^2 + \frac{x_j^2}{2} + \frac{|x_j|}{2}\sqrt{x_j^2 + 4\sigma^2}\right) \right] \\ \phi(x_1, x_2) &= \min_{v} \left(\frac{x_1^2 + x_2^2}{v} + 2\log(\sigma^2 + v) \right) \\ &= \left[\frac{4a}{\sqrt{a^2 + 8a\sigma^2} + a} + 2\log\left(\sigma^2 + \frac{a + \sqrt{a^2 + 8a\sigma^2}}{4}\right) \right]: \ (a = x_1^2 + x_2^2) \\ \end{split}$$
Hyperparameter tying

Plots of cost functions



- (a) Champagne cost function with tying hyperparameters.
- (b) Champagne cost function with no hyperparameter tying.
- (c) Cost function for L2-norm regularization.
- (d) Cost function for L1-norm regularization.

 $\phi(x_1, x_2) = x_1^2 + x_2^2 : \text{L2-norm regularization}$ $\phi(x_1, x_2) = \mid x_1 \mid + \mid x_2 \mid : \text{ L1-norm regularization}$

Computer Simulation



Source time courses



Signal magnetic field



- 275 CTF sensor array
- signal to sensor noise ratio:16

Results of Computer Simulation



Diagonal covariance with hyperparameter tying



Champagne with a block-diagonal covariance needs twelve times longer computation time, compared to the champagne algorithm with a diagonal covariance matrix. SBL beamformerに関する発表 Biomag2016におけるポスター



Multi-resolution champagne beamformer

Sekihara K.^{1,2} Nagarajan S. S.³

¹ Tokyo Medical and Dental University, Tokyo, Japan
 ² Signal Analysis Inc., Tokyo, Japan

³ University of California, San Francisco, USA

Summary

The sparse Bayesian source imaging (Champagne) algorithm has proven to be effective for neuromagnetic imaging [1,2]. It is robust to various types of noise and interference, and it can reconstruct multiple sources, even when they are highly correlated [2]. However, one serious problem of the algorithm is that it is computationally expensive because of its iterative nature.

In this paper, we propose a novel algorithm, called multi-resolution champagne beamformer. In the proposed algorithm, the first step estimates the model data covariance by using the sparse Bayesian scheme, and the second step implements the adaptive beamformer source imaging using the data covariance estimated in the first step[3]. The key point of the algorithm is to exploit our empirical findings that the quality of the estimated data covariance does not very much depend on the voxel size in the first step, while the voxel size primarily determines the quality of the source reconstruction in the second step. Therefore, we can significantly shorten the computational time by using a low-resolution voxel grid in the first step but still obtain the high-quality source images by using a high-resolution grid in the second step.

Computer simulation verifies the performance of the algorithm. Unlike the conventional adaptive beamformer, which uses a sample covariance matrix, the proposed champagne beamformer can be applied to a case where correlated sources exist and a case where only a short time window with a small number of time sample is available. The algorithm may be useful in non-brain electrophysiological imaging such as cardiac imaging in which problems of correlated sources and/or a short time window are common.

References

[1] Wipf DP et al., Neuroimage. 2010; 49(1): 641-55.

[2] Sekihara S and Nagarajan SS, Electromagnetic brain imaging: a Bayesian perspective, Springer, 2015.

[3] Wipf DP and Nagarajan SS, Proceedings of the 24th international conference on Machine learning (pp. 1023-1030). ACM.

Sparse Bayes source imaging (Champagne) algorithm

Data model:
$$y = Fx + \varepsilon$$

Probability model: $p(y | x) = N(y | Fx, \sigma^2 I)$
 $p(x) = N(x | 0, \Upsilon)$

The hyper parameter $\boldsymbol{\Upsilon}$ is obtained through maximizing the marginal likelihood

$$\log p(\boldsymbol{y} \mid \boldsymbol{\Upsilon}) = -\frac{1}{2} \Big[|\boldsymbol{\Sigma}_{y}| + \boldsymbol{y}^{T} \boldsymbol{\Sigma}_{y}^{-1} \boldsymbol{y} \Big],$$

where the model data covariance is defined as

$$\boldsymbol{\Sigma}_{y} = \boldsymbol{\sigma}^{2} \boldsymbol{I} + \boldsymbol{F} \boldsymbol{\Upsilon} \boldsymbol{F}^{T}$$

This maximization can be implemented in several ways, and the one we have developed is described in [1,2].

Champagne beamformer

The champagne beamformer uses the model data covariance derived from the champagne algorithm[3]:

$$\boldsymbol{w}(\boldsymbol{r}) = \frac{\boldsymbol{\Sigma}_{y}^{-1}\boldsymbol{l}(\boldsymbol{r})}{\boldsymbol{l}^{T}(\boldsymbol{r})\boldsymbol{\Sigma}_{y}^{-1}\boldsymbol{l}(\boldsymbol{r})}$$

The conventional adaptive beamformer uses the sample data covariance R derived from a data time window containing many time points[4]:

$$w(r) = \frac{\boldsymbol{R}^{-1}\boldsymbol{l}(r)}{\boldsymbol{l}^{T}(r)\boldsymbol{R}^{-1}\boldsymbol{l}(r)}$$

[4] Sekihara K and Nagarajan SS, Adaptive spatial filters for electromagnetic brain imaging. Springer, 2008.

Data generation for computer simulation

Computer simulation geometry

275 (CTF) whole head sensor array was assumed for data generation.

Time courses assigned to the three sources



Simulated sensor recordings



The model data covariance was estimated with voxel grid of 1.5cm. The beamformer scan was performed with voxel grid of 0.2cm.

Results of Computer Simulation with no array mismatch



coordinate of three sources: [0 -1 7], [0. 1 9], [0. 1 5] (cm)

Results of Computer Simulation with array mismatch



coordinate of three sources: [0.5 -1.75 9.75], [0.5 2 9.75], [0.5 1.25 6] (cm)

Reconstruction of perfectly correlated sources



The first and the second (the upper two) sources are nearly perfectly correlated in the bottom case.

Comparison of computational time



Condition # of iteration: 400 # of time points: 1200 # of sensor channels: 275 reconstruction volume: 9cmX9cmX9 cm

Intel® Core i7 3.4GHz 32GB memory 64 bit windows 7 matlab 2014b